



外国にルーツを持つ 子どもたちの就学をサポート フレンズサポーター



全国的に人口減少が進む一方で、外国人は増加傾向にあり、筑西市では約5000人が住んでいます。そのうち小中学生は約250人にのぼり、言葉や文化の違いに悩む子どももいます。

関城西小学校では、毎週金曜日に外国にルーツを持つ児童たちが集まって勉強する場所があります。今回は、子どもたちの学習支援を行うボランティア団体「フレンズサポーター」(以下「フレスポ」)代表の山本桂子さん取材しました。

支援活動を始めたきっかけ

山本さんは、令和4年に「外国人



おだまり ともこ
大泊 知子 さん(黒子)

成長を見守るメンバーの温かな眼差しと、子どもたちの笑顔がとても印象に残りました。



代表 山本 桂子 さん

の子どもたちの就学支援スタッフ養成講座」を受講したことをきっかけに、外国籍の子どもたちへの支援活動を始めたそうです。現在は関城西小学校を中心に市内小学校3校で活動しており、児童一人ひとりに寄り添いながら支援を行っています。

自分の気持ちを言えるように

「この教室の一番の目的は、子どもたちがリラックスして、日本語で自分の気持ちを言える場所になることです。日本語を話して伝わる喜びを味わってほしいと思っています。1時間の授業のうち、たったひと言でも日本語を覚えてもらえたときや、言葉が全く通じず最初は黙ったまま

だった子が、会話を重ねていくうちに心を開いて笑顔を見せてくれたときにやりがいを感じます。子どもたちから学ぶことも多く、成長に関われることが嬉しいです」と話す山本さんから子どもたちへの深い愛情を感じました。

関城西小学校の永盛教頭は、「この日本語教室で一緒に勉強しているときの子どもたちは、表情がいつもより優しく見え、心の安定が図れているように感じます」と、子どもたちにとって大切な場所であると話しました。

日本語指導の工夫と課題

来日してからの年数や日本語の理解度、在籍学年も異なるため、個々のレベルに合わせた支援が必要で、学校のプリントだけでなく市販の教材や自作の教材などを持ち寄るなど、教え方を工夫しているそうです。

取材当日は、おもちゃのお金を使って算数の勉強をする児童や果物や動物のカードを使って日本語を勉強する児童の姿が見られました。「本当はマンツーマンで子どもたちを見てあげたいのですが、人手が足りないのが悩みです。」



英語ができないと教えられないと思っている人が多いですが、ほとんどの子どもたちは英語圏出身ではないため、英語は話せません。日本語で話しかけて日本語に触れる機会を増やしてあげれば良いのです。まずは、私たちの活動をたくさんの人に知ってもらえればと思います」と、山本さんは活動のさらなる広がりに期待しています。

取材を終えて

外国にルーツを持つ子どもたちが増えている一方、日本語を学ぶ環境が限られているのが現状です。地域での助け合いやフレスポのような団体による支援活動が、子どもたちの学びの場を支えているのだと感じました。

【問】フレンズサポーター 山本

☎080・9023・6841

◀一人ひとりに合わせて学びをサポートする様子